



假名讀

改正西國立志編

中村正直原譯
中邨秋香和解

二

9
4121
2



9
4121
2



假名

改正西國立志編第二編一名自助論

論

藤田氏曰法書

休彌爾列爾

休彌爾列爾の工作の事を非常な勤勉つゝ、勞苦
たりし人なきは、おほよそ工事の上よりつき、艱辛
さ甘樂さを委しく味ひ得たる事、他人の及ぶ所
みあらず、其身實地は經驗をとり、心を得たる其
説を或る時人より語りて言つらく、都て工事の精
を凝らし勤めて之を做事の如何程苦く業
みんせよ、其作事中おのづから言辭も述べ盡

假名讀立志編卷二



さきぬ數量りあき樂趣ありて、こまより自然と
勤勉もいつく知らぬ覺えに身の行状も、いつの
と修り整ふものぞと、又言ひたるの精神を入き
て做せ工事の、最巧者ある師匠と同く、勤めて
勞つく工作場の取も直さば學校にて、此學校ら
諸々の學校よりも最貴とし、何故あまの斯の如
く勤め勞づく場所は於て、自然と人の才能を
生し、自然と人の助を求めぬ志を引き起し、自然
と事な堪へ忍びて、辛抱強き慣習を付け、自然と

精力を長むきありと、彌氏の殊な器械をもて
其工作をとり取り扱ひ、修煉工夫を為せをりて最
肝要ある事とありつ、又或る時の物語りも、余の
昔より工事を日毎々々操返り意を注ぎて
操習するが、是より思考も才出で、真面目の經
験をば充分心は收め得たが、さきば余が此生涯
の、長き旅路の道中を、道志るべはる按内者も力
を添ゆる道連れもあく、獨り立ちして障礙あく、日
毎は進んで行くものも、全く工事の學習は便り

頼る事最も多しと彌氏の千八百。二年我國享和二年は生きたる人あり、

⑤ 蒸氣機器の創造

凡そ萬の機器の中にも蒸氣の機器を其種類の
大君とこそ言ふべけき、そも此機器を發明して
創めて造り出したるを、近き時代の事なりか
ら、のりる機器を作らむと始めて思ひ起す、
ハ今をさる事數百年の昔の人の起想にて、いと
年久しき工夫を経り、されば蒸氣の機器ハ

も、他も機械を作する如く、一人は人の工夫より
其一代の間は於て拵らへ上げたるもの、何
ら、前々この人種々様々心を苦しめ思を凝ら
して考へ置きたる筋を追ひ、其後の人亦同く
其志を承け継ぎ、艱難辛苦の月日を送り、工夫
の上にも工夫を重ね、三代四代と世代を積り、次
第々々發明して、漸く成就せるものなり、始め
て考へ起し、人を紀元前百二十年の頃、亞力山
德里亞と言ふ地に住し、布洛と名のりし人

して元來算學並氣學水學はさへ明達にて総て思考の最緻密は精詳く立てる人ありしが此人始めて蒸氣の力を經驗の道具を作り出せり其考へ出〜理も未永く世は傳はりて終は近代の時世に至り巧も又妙は〜て言語も筆も及ばざる器機をこそ成就して考ま〜も〜創めて此器機を作り出〜其人の種々無量なる艱難は辛苦は遭ひて撓まば屈せば最も雄々〜成〜遂げたるは恰も剛猛無雙の勇士り強

勅き敵と戦ひつゝ鎗襖を超え矢玉を凌ぎ必死を極めて遂に能く之は勝得〜の如く世は比類なき功業といふべくさて此器機の上はつきて最も功業を顕はしたるは薩代禮牛國民高禮勃的爾斯彌敷惹迷士瓦德等は〜薩は火器を扱ふ人牛は鍛冶屋を職となし高は玻璃の職人みゝ勃の作事場の小厮は出で斯は測量の役人を勤め瓦は算術の道具を作る職人にてこそあり〜あま

⑤ 惹迷士。瓦德

瓦德ワット蘇葛蘭スコツトランドの人なり、性來うまるとしちより器用きようにて年としまだ幼弱いせひちやうく頃ころ玩戲あそびの道具類だうぐいるいを以もつと巧たくまくは指さらへ作り、父ちちの大工おおいを職あやとして生業よつぐをか以もつ人ひとなり、
 里さとく象限儀ちやうげんぎとくも名づけたる、測量道具そくりきうぐうぐの其
 舗みせは従前まへよりして有り合あせくを瓦德ワットもこそが
 使用法つうひほうを委まかしく問とひて熟まく了解がくし、此道具ここのだうぐいは依よ
 り視物學しぶつがくとて物を委まかしく視みるの術じゆつ又天文學てんがくとて
 天文てんぶんを推おし究きまむる術じゆつの山口やまぐちは漸しだく其歩あぢを進すすめ

初はつめつ、其上そのうへ瓦氏ワツを虚弱きよじやくにて常々つねづね病身びやうしんなり、
 生物躰質せいぶつたいしつの學がくと言いひて、生命せいめいの理りを推おし究きまむ
 る、學門がくもんは深く心を留とどめて、終つひは能よく其源そのもとを極きまめ、
 又養生やうじやうの爲ためとて平常つねじやう獨ひとりり野邊のべは出いで、心こころのと
 りは遊歩ゆうぷする、此時このときとては徒ひたら光陰ひかりのいんをば
 費あさば彼處あつちは此處こゝは生おくげる野邊のべの木草きくさは意い
 を注そぎて、其學そのがくをばなしたり、瓦氏ワツやうく
 成長せいぢやうせむらば算術道具さんじゆつだうぐいを作りつ、其生計そのせいけいをば
 立てたりけるが、其頃このころ瓦氏ワツは細工事さいくことは總まて器用きよう

の人なると世間又評判してゝまば、或人大風琴
をくも造らん事を注文せし、又まきも一つの學
問あらんと喜びて承諾つ、是より始めて調子を
調べ和せる事を學びつ、其後細工又取つ、又
最手際よく造り上げたり、又此頃の事ありと
や、額拉斯哥といふ地の學校は牛國民が作りて
納め、蒸氣機器の雛形ありしが、器械損して運
用をふさぐ、うらまど、通常の人能修復し得べき
又ありねば、さて其儘又爲し置しを、瓦氏又托ま

成りもやせんとして、其修復を注文する、瓦氏
は左右をく之を諾ふひ、扱其機器を親しく手
の事委しく見つ、細く考へ、是より始めて前
の人の既日發明あり置き、熱の作用を、以
事より蒸氣の漲開せる理合、また收縮せる道理
を求め、竟は全く之を修復し、彼雛形を返し納
めつ、是より只管工夫を凝らし、彼より優る蒸
氣機器を、いりて造り出さん、ものを、他事か
く一途、又心ざし、眠も食も打忘、艱難辛苦の險

しき道路は、永き月日を送り迎へて、怠りもあく
勤勉めたまへ、遂に縮密蒸氣機器と云ふ機械
をこそその發明してけし、瓦氏に始め牛國民の作
りし機器の雛形を見て、其縮密機を作らんゆ
と、初めて思ひ起し、終に之を造る迄、
數多の月日を送りけるが、其猶工夫中ある時、
必造り果せば、との確き見込も定めがたく、又
朋友の之は同意し、力を添ふる者として、甚少の
りしなれど、瓦氏は是等を事ともせ、其志の鍊

よひと、只管工夫し、心を盡しぬ、されども其
家富めるはあ、ね、一家の生計を立つるが爲
め、平常象限儀を造り、また胡弓や簫管の類、
其外種々の樂器を作り、之を嚮ぎて生業とし、あ
る時、又人は托ま、左官の工事の測量をおし、
又道路の普請を見廻り、水道の修繕を取扱ひ
つ、是等の事にて、僅々も、其生計を立てたり
けし、其後馬寶、葡爾敦と言ふ、いと良き一人の友
をば得つ、そのりと、工事は老煉し、即ち工事の

師首として、よは俊まざる人物なるが、思慮いと深く根氣強く、遠き見込の立つ人よて瓦氏の造り出したる、縮密機器を用ひつゝ、多くの人の力よ代へ種々の工業を營みて、遂は瓦氏の功勲を全く大に立てしめたり、
 ⑤ 蒸氣機器の種々の用
 智慧深くして思慮至まる、數多の人々引續き、世上に出で、蒸氣の機器を彼は考へ是は工夫し、まをく運用の妙を極め、いよく便利の法を

案、遂は種々の工場は夫々用ある事とありて、或は機織り糸繰る業、又は金銭貨幣を造り若くは鍊を鋳ち鍛へ、或は削り平らぐる、器械を動かす作用をおし、其外船は用ひて、萬里の波濤も以と安く之を退ぞけ或は進め又は數百數千斛の穀物をして忽ち粉とす、又は數千數万の書物を見るく摺り立てつ、たれよそ世間一切の大なる力を要する事、お人おへて此機器を用ひ、人の力よ代るよ至まり、其中更は取分け、

最肝要なる改変の新工夫を考へ、托列
未集と士提反孫との親子二人の力よして、其新
工夫の他事あらざ、今日種々の用をなせる、蒸氣
機器の其中にも、格別勝れて有用なる、氣車は用
ある行動機器を、元來托氏の工夫は始まり、士氏
に至りて成りたる物にて、此機器の成就あり、世
間は偏ねく行はざしより、國のすべてに有様の
大は變じて、世上一般便利を得る事一形あり、
はるく世界は福を授けて、文明開化は誘ひたり、

⑥ 紡棉機器

瓦徳が新規な蒸氣の機器を作り出し、後引き
續き種々の機器の發明出て、凡ての工業便利
はかゝるむき、工場益々繁昌するが、其内最も
初に當りて世上は遍ねく行はざし、紡綿機と
いふ機器より、始めてこきを發明し、工場の基を
開きし人の力查阿克來と云ひしが、此人元來創
意工夫の名人あるのこあり、事實を試み考ふ
るは、氣根あり分別ある事、遙は人より勝れたり、阿

克來ら千辛万苦の長き月日を積み累ね始めて
 紡棉機器を製造り出し、創造者の称を得たり
 夫れ其始に當りてはさうみくき世の口の端
 最安ありぬ異論を受けつ、その阿氏の紡棉機
 を新規に作り出したりしを、瓦徳の蒸氣縮密機
 士提反孫の行動機器を始めて作り出し、如く
 皆こと古人のなし置きうる工夫又本づくもの
 との以つらる、何とも都て世に功ある、新大發明
 とぞ云ふべきなる、譬へば古人のなしたる工夫

糸の散乱せし者の如く、三氏の各之を集め自
 己の見込に從ひて、新に之を織りたる者あり、
 創造者といふ称を受けて、世に尊まを重んぜら
 る、亦當然の事といふべし、阿氏よりして三
 十年前保爾と云ひし人ありて、圓く轉はる木を
 用ひ、糸紡る事を發明なり、終に公許を受けたり
 一らど、其機器は猶未だ充分の工夫を盡し、至
 らざり、實地の用を爲さざり、又海士と云ひけ
 る人、紡績器械を造りし、是將に終に成効を

見ざりき、総べて工場にて用ふる蒸氣の機器
をむすめと、或は礦中提燈と、又ハ電氣通標
の類の如き、便利を極むる新發明を、世上に於て
望む時、又ハ工夫の考思ある人々ハ、新規之を
發明して、世上の望に應ぜんとして、銘々以つても
心を勞し、氣根を盡して考へつ、吾先きよと
を競ひたるが、其内より格別けて、人ハ勝る
才思あり、然ル實地ハ鍛鍊して、學問ある人、遂に
能く之を造りて、功を成せり、さきハ其他の見

込を立て、終に發明せざりし人、皆其望を
失ひつ、即ち之を發明せし創造者を恨み、妬
み種々浮草の根を、言をいと巧み言ひ拵ら
へつ、甚くも之を謗毀り合ひつ、さきハ瓦徳を
始とく、士提反孫と云ひ、阿氏と云ひ、皆此謗毀を
大より好むが、いゝるともして發明せし其名譽
を、失はば、且ハ創造者の受くべき權を、いゝと
ともして保たんめのをと、様々心を碎きくなり、

⑤ 力查阿克來

阿克來アークライドハ一千七百三十二年我ガ享保十七年の
 生なまみして、英國イギリスの普列斯敦プレストンといふ地ちニ住すまめる、い
 とも貧まかくき人の子あり、其兄弟せうけいハ十三人あり、
 ガ、阿克來アークライドハ其中うちの最も末まへの子こニてぞありける、
 父母ふぼハ素もとより貧まかくき上うへニ、子供こどもニへ斯うく多おほり
 々さまハいとゞ活計かぢも立たてり子こけるより、阿氏アを
 ハ幼少をさかき時ときよりして、近ちかき郷里きやうりの剃頭店しづいニ、送おくり
 て弟子でしとななりたり々さまバ、阿氏アハ此處こゝニて生長ひたひた
 り、終つひニ剃頭職しづいといふ名なをぬか、々さまバ阿氏アハ此處こゝ

を去さり薄爾敦ボルトンといふ地ちニ引ひき移うつり、或あるる地窖室あくらら
 を借かり受うけて、之これを剃頭場しづいニ造つくりあし、そが上うへの
 道路ぢぢニ招牌かんばんを立たて、此地こゝの下したニ剃頭職しづいあり、價あひ一
 便尼べんにありといふと筆太ふでぶとニ記あたり、抑々おほく一便尼べんにハ
 英國イギリスニて常つひニ用もちふる銅貨どうがの名なニして、他たの剃頭しづい
 店みせより下直げしきの價ねあり、こハ其價あひを低ひきくして、客きやくを
 招まねるんとしてなるを、他たの剃頭店しづいニても之これニ倣あやひ
 即すなはち價あひを引ひき下さげ、々さまバ、阿氏アハ猶なほまハ價あひを減く
 半便尼はんべんにと云いふ招牌かんばんを出いすつ、志こころも他事たなく

其業を勉強しつゝ骨折りたるは、自然と愛顧の
 客も多く職業次第は繁昌し、三四年の光陰を
 此地密室の中にて送りぬ、元来英國より婦人の
 頭は假髪を着くる風俗ありて、此時代までも行
 はる假髪を製する職人の割よき利益を得る者か
 りしが、阿氏の自ら思へる様我がかく計り職業
 は勞き盡くち力をもて假髪を製する職をあさば、
 更は利益も多あるべしと、即ち此地を立ち去
 りつゝ、職業變へて假髪職となり、蘭加舎といふ

地は移りぬ、さるに此地の種々の職工場盛大な
 る、日傭は出る手弱女の多く集合まる處あるは、
 平常此は往來して其髪をとり取り整理へつ、殊
 は阿氏の製練法もて、毛を深むる事は巧妙なる
 ば、こまらをもて商買と雖、大に利益を得たりし
 が、此時分りも假髪を着る風俗漸く廢たりよ
 けま、是より阿氏の紡棉機をいゝよともして
 造らんものと始めて思ひ起しつゝ、其事は手
 を下し初めたり、

元来阿氏の假髮職を其身の業とあしむる頃より、其職業の間隙ある毎に、人手を借らば自然に活動く、機器を造り出さむやと豫々心より、おけ、追々工夫を用ひし事ゆゑ、此時に至りて紡棉機を作らんと云ふ大願をおうおく思ひ起たるも、固是き因由のある事あり、かく志を立てたる後、只管工夫を砕き、一途は此は力を用ひて、種々様々の経験をなす其日の生計を急りけむに、終に年来丹誠して貯へたりし金銭財

貸物漸く使ひ果たつ、今に僅に日を送る、竈の煙りも、心細きいと窶々しき身となりぬ、まは其妻某の阿氏がかくまで益あき事は空しく、勞して徒らに、財と時とを費やせをいと安らぬ事と思ひ、常は不平な堪へざりしが、或る日風とせし評論より忿怒は任せかく計り貧は逼るも此物故として、阿氏が作りし紡棉機器の雛形より手も觸きて散々打ち砕きしに、阿氏も亦大に怒り、遂に妻を逐ひ出さる、是より

後の其身の外より別は養ふ者もなけむが、阿氏
の大は心を安んじ、全く其身の家業を廢して、只
一筋は其心力を機器の工夫に用ひてけり、
爰は話林敷といふ地は客耶と名する時計匠あ
り、巧妙の工夫をなす人なりしが、阿氏を客耶と
交はりて、深く懇意を結び、其發明せし機
器の内容客耶より傳へしものありとの説を言ひ
あそ人もあれど、その左も右もあき、縦
や客耶より其一分を授けり傳へし事ありとも、

阿氏は一たび其手掛りを得て、之を其手は握り
し上り、之は縦りて工夫を積み、次第を追ひて急
らば、遂は全く成り果てたむが、其全躰の功勳
の固より阿氏は歸せべきなり、却説も阿氏の客
耶は托して、曾て作りし自動機器の雛形をば持
ち居たりしが、即ても之を普列斯敦の學校中
備へおきて、廣く人への示したりき、此折適々民
委官を選擧なすべき期限は當り、阿氏の縣邑の
民あり々を、其選舉會は赴きて選舉なすべき

苦なまどども、衣服いゝみも襤褸まで出あるくべ
 き様あらざまば、阿氏と交わる人々を、皆氣の毒
 の事と思ひ、即ち金銭を醵集つゝ阿氏は衣服を
 買ひしめたるは、是にて漸く其會は赴く事を得
 たりしとぞ、阿氏の貧窮困難にかくまで甚し
 りしなり、
 元來普列斯敦といふ地より、手仕事をりて生計
 を立つる人民多分は住む場所をまば、阿氏が出
 離形をきて、此機器の十分は若く出来上り

る事ならば、各自手業を失かひて生計は困窮せ
 る事もやあらんと、大に恐を惑ひつゝ、學校近傍
 は寄り集ひて物騒ありく罵り譟ぎつゝ、よりて阿
 氏の心の中は竊に思ひ回らば様前あら客耶の
 飛梭を作り出し、時は當り、多人數乱を騒たち
 て遂に蘭加舎より逐ひ出さるゝ、厚額理武士
 の紡棉機器を作りし時にも、衆人騒立ち乱妨し
 て、無二無三ゆも其器械を粉齧は毀ちし事さへ
 あは、このまの余も今此土地は、永く留まり去る

を知らず、いふある不測の災難、羅らん程も
知るべからばとて、彼の學校は備へ置きたる機
噐の雛形取りも敢へば包む荷物の旅仕度、普列
斯敦を出立して、諾丁含の地へ赴きぬ、諾丁含の
銀行商ある某氏、まゝ此土地の豪家ある來的と
云へる人々、あど阿氏の機噐の雛形を見、又其説
を親しく聞きて、何れも大に賛美し、つ、各々若干
の金を出し、阿氏を助けて、此機噐の出來上ぐら
ん日を期して、互に其利を分配んと約し、つ、さま

ど其後機噐の成就、此人々の思ひより、按外
遅滞して、つ、銀行商の某氏を阿氏に勧めて、
其土地を以て最も豪家の聞えある斯土拉的とい
へる人、並びに尼徳と云へる人、面會し、つ、是
までの事、次第を委しく語り、其助成を乞ひ
しめし、期土拉的の之を打聞き、且其雛形を一
覽して、是を真に必用とて、世に大利益ある物な
るべきとて、大に之を賞美し、つ、忽ち社中を加
はり、つ、斯氏の織機機を製し、免狀を得、人より

て世の信用も輕らざりしが、此人斯く迄賞義
くて忽ち入社志たりしが、是より世上の信を
も得阿氏年來の志の漸く達する道路開けて終
よ一千七百六十九年我邦明和六年は當り此機
器全く成就し免状を受けて此機器の利益を專
ら其身に收めぬ是を彼の瓦徳が蒸氣機器の免
状を得し其年と全く同一年なるも奇ありとこ
その云ふべきか、かくて諾丁舎の地は於て始め
て棉磨を造り設け馬力を以て之を曳り、後

大伯舎の地は於て之を造り設けたりし
が、此其建設更は水車を以て運轉せし
め、依りて紡棉機器を名づけて水機とも呼ば
なり、
阿氏の斯くして勉強し千辛万苦の勞を重し漸
くよく免状を得機器を用ふる事となきと
是より後の工夫は於て更は困却を極めたり、
その此機器の荒増こそ既に成就しなしたまは
も其細密なる仕組は於ては猶十分は至らねば

之を改め造らんとて多くの年月心を用ひ力を
盡し數多の金錢財貨を費やし、眠食をさへ打ち
忘る工夫は他事もあらず、かゝる程は阿
氏の機器の追々盛る流行すべき有様なるより、
蘭加舎の地は在りて手仕事を以て生計を立て
る人々俄に騷立ち集まり阿氏の家は踏み込
て、其免状を奪ひ取り、之を裂るんと企て謀りつ、
其勢甚だ猛烈にて、然る阿氏を工人の仇敵ぞと
言ひ觸らば、蘭加舎の地は前つて、阿氏に設け

し仕事場は多人数打ち連れ乱入し備へ置きた
る諸般の器械を一ツも残さず打ち毀てり、此時
巡查兵士をと力盡して制せしむと其勢い
あはれも猛くして、終に之を防ぎ得ぬかゝる人氣
に乗らば、蘭加舎の商人は阿氏に製せし物品
をばふつと買ひ取る者もあらず、又其阿氏の機
器をいも用ひと業となはし人々、是を幸の機會と
し創造者より對し拂ふべき利銀を出さぬのこ
らむ徒黨を結びて訴訟を起し、理否も分たず

無慙むぜんも阿氏アの免狀めんじょうを奪うばひ上げつかく道みちからぬ事ことをもて阿氏アを困こしめ窘たじむるを、聊心りょうしんある人の最心さいしんるき事ことは思おもひ、竊ひそか怒いり憤いきんりぬ、此公事このこうじ終をりし頃ころありとや、阿氏アの或ある日ひ要事ようじありて彼の原告げんごうが旅泊りやくぱくせる旅店りやくてんの前まへを過すぐる折まぎしも原告げんごう人の阿氏アを見て傍側かたがはの人ひとは語かたりて言いふ様ようあふ心地こころよや、吾々われわれを彼の老耆らうしの剃頭者かみづかひを、飽あくまで困こしめ窘たじめたりと、阿氏アの之これを聞きくや否いな阿々アアと打笑うちわらひ、我尚われなほは一挺いつていの剃刀かみそりを我われの懐中こぶちに所持しよじ

たが、此剃刀このかみそりもて汝等なんたらを坊主ぼくしとせんこといと揚あげと声清朗こゑせいろうよぞ答こたへたる、また阿氏アの年來ねんらいの丹誠たんまこと空おれしゝらざして終はは至極さいごくの便利べんりを盡つくし、寢上ねじやう至妙しめうの工夫くわふを極まめ、完全かんぜん無缺むけつの機器ききを造つくり果はる事ことを得えて、更さらは新あらたし蘭加舍らんかしゃまた大伯舍たいたいしゃ、牛拉拿古ぎゅうらくなこの數かず々々所ところの土地とちは紡棉ぼうめんの織工場おりのくわをも取り建てつ、盛大さかんな工業こうぎょうを開ひらき、又斯土拉的ストラットの肝煎きんせんりて大伯舍たいたいしゃの地ちは取り建てたり、工業場こうぎょうばさへも期土拉的ストラットが死し

ての後、全く阿氏の有とれり、諸地の場
所より製し出し、製作品も最多く、其上阿氏の製
作品、何れも上等なり、自然、又賣買の權
押し移り、終りの物價の相場さへ、其手は由りて
定めらる、又紡棉の職人を自然、赴むく勢にて、
都て阿氏の支配を受くる事とまでなりきつ、
大に其志を達し、
阿氏の天性勇ありて、物に恐まじ、毅として事を
必ざ果し、然も世間の事は應じてよく其を取扱

く器量あり、其諸處に紡棉機の工場を建設く
る時は當りて、殊更繁忙あり、頃、常は曉
四時より起き、夜は九時報せらる、至るまで聊
休息せる間も、かく勉めて事を營むるに、さるる
阿氏の若年より、かく暇なく世を経歴りて、英國
の文法書を知らざり、るを大に悔ひ、其年五十
に満ちたる時、始めて之を學び、初め、夜を日
に繼ぎて勉強なし、終に能く之を成し、遂げぬ、
る程、阿氏の名、次第に高く顯はせけり

バ終ニ政府の命を受けて、大伯舎の地方官ある、
知府と称する官に任ぜらるることぞ最初の機器
を作りし時より第十八年目より當りけるが、是
よりして樂程なく英王若爾日第三世より、其
紡棉機器を造り出し、賞典として、奈的といへ
る爵位を賜り、世に面目をば施しけり、この
て阿氏の一千七百九十二年我寛政四年に當り
齒六十一にして歿す、抑々紡棉工業場の、唯其工
業場の利益とあるのこならびして、國の全躰の

貨産を生し、利益數へり盡さべし、さるる阿
氏の其創造者にて基を立てたる人あまは、世上
に與へし功德に千萬年の末に至るも、終に盡る
とあらざあべし、

③ 比爾及び印花機

白き布の上は唐草の模様を印す機器
を印花機といふ、

比爾の一族の元祖は、凡そ千七百五十年我寛延
三年前の頃、當りて、伯拉訖畔といへる地は、

住居たりといと貧窮ある百姓は、羅伯比爾
 と名のり一人あり、幼き子供數多ありて農業は
 こを營に在りて、其日の生計も立ち難きはよ
 り、農事の際もて家族と共に、機織る業をぞ營に
 初めける、元來此地の機織職の家多く、其織り出
 以反物の、經を木棉は緯を麻にて織りたるも
 のにて、其名を伯拉訖畔原色布と言ひ、百姓の内
 まで生業は骨を惜まぬ者の傍らこそを織る
 事ありしが、比爾一躰正直ある人にて、其織る

業は念を入きて、極めて地合の好き布を織り
 出たりせば、之を買ふ者次第も多く然も比爾を
 節儉を守り、唯一筋は心を盡して其業をくも勉
 めてくまは、是より生計も寛く赴むき其家漸々
 富に榮えつ、さて又比爾の何事は依らば辛苦艱
 難は堪へ忍び、之を爲し遂くる氣象ありて、且ま
 た其うへ見込のいと高く立つ人ありしが、此頃
 供も木棉や麻を振刷ふる圓形の筒器を新工夫
 造り出さる者ありしを世は格別必用ある

假名讀心經卷二

そのともあやぶまきど比爾の獨り之を見て
是ぞ便利の器械あるとて早くも之を用ひ初め
たり此頃までの布の表は唐草模様を摺り印を
術へ、まづ世は知る者なかり、比爾は始めて
之を考へ、いゝみりて白布の表は画を摺る機
器を造らばやと種々様々は工風を用ひつ、其時
代の風俗はて比爾位の身代ある家まで、ビュ
リアと名づけたる錫と鉛とを交へ合せて製せ
る磔を常に用ひし事あるが、或る時比爾は其磔

跡上は假し圖形を彫り付けて、心の内は思へる
様此圖形は画の具を塗りてさて白布は押し事
あらが反對の圖形を白布は印さんと、其頃同
き村の内は布を押し、地合を平均し布の表は
光澤を出し、カレンデリングマシオンといへる、
圓き筒形の器械を所持せる婦人あまは、比爾は
即て其家に至り、此器械を借り受けて、磔の圖形
を彫たる處は画の具を摩り付け、これに白布を
被ひつゝ、その器械を用ひ之を押したり、

按^あ違^{ちが}はば其^{その}圖^ず形^{がた}を^を、最^と鮮^{あざ}明^{やう}な白^ぬ布^のの表^{あは}は印^ろ
 く出^いぬ是^こぞ真^まな印^{いん}花^か機^き器^きを造^{つく}り出^いせる原^{もと}始^{はじめ}
 なりける
 かくて其^{その}後^ご工^く夫^ふを^を用^{もち}ひて、印^{いん}花^か機^き器^きを^を作^{つく}り上^あげ
 て始^はめて印^おいたる時^{とき}の摸^も様^{よう}の、芥^{せう}の葉^はの形^{かた}なり
 ころば、其^{その}近^{きん}邊^{へん}よての比^ひ爾^にの事^{こと}をパ^パー
 ス^スレ^レイ^イビ
 ール^{ール}と喚^よびくとぞ、パ^パー
 ス^スレ^レイ^イと^との芥^{せう}の事^{こと}なり、
 此^こ印^{いん}花^か機^き器^きの木^きよて作^{つく}り
 圓^{まる}形^{がた}の筒^{つつ}の面^{おもて}は圖^ず
 形^{がた}を凸^たく彫^ほりたるものと、銅^あよ
 て作^{つく}り圓^{まる}形^{がた}の

筒^{つつ}は同^{どう}く圖^ず形^{がた}を凹^ぼく彫^ほり
 と摺^{すり}り合^あせて印^おも
 のなまゝを其^{その}子^この代^{だい}は至^{いた}り
 後^ご更^{さら}は工^く夫^ふを
 用^{もち}ひつゝ、終^はつと全^{ぜん}き機^き器^き
 と^とのな^なりたり、かくて比^ひ
 爾^に其^{その}職^{しやく}業^{ぎやう}ま^まとく利^り益^{えき}
 ありたりと、遂^{つい}は農^{のう}業^{ぎやう}
 を^を全^{ぜん}く廢^{はい}し專^{せん}ら白^ぬ布^のは摸^も様^{よう}
 を印^おも職^{しやく}を^をりて
 業^{ぎやう}と^とのな^なりつゝ、其^{その}數^{かず}多^{おほ}
 なり、子^こ供^{ども}も皆^{みな}生^{せい}長^{ちやう}とる
 又^{また}從^{したが}ひて、父^{ちち}と同^{どう}く
 勉^{けん}強^{きやう}ありたり、皆^{みな}夫^{おつ}々^と
 分^{ぶん}家^けして、終^はつと數^{かず}軒^{けん}の
 家^{いえ}とあり、各^{おの}々^{おの}商^あ賣^う
 繁^{はん}昌^{ちやう}つゝ、數^{かず}多^{おほ}の
 職^{しやく}人^{にん}を召^めして使^{つか}ひ
 たりと、近^{きん}郷^{きやう}近^{きん}在^{ざい}の

貪まくき人々皆みな此こゝ比爾ビールの一家いっけを便たよりて、こまこま又また赴おもむき生計せいけいを立て、世渡よどりの杖つゑと仰おほげまき、
 羅伯ロバート比爾ビール第二世だいにせの才氣さいきと以もつて器量きりやうと以もつて且かつ其その
 力ちからめて業わざを勵もむこそ父ちちの比爾ビール又また異ことならぬ終つひに
 巴洛涅パロネット的てきと以もつてへる男爵たんのしやく又また次つげる爵位しやくゐを受うけた
 る世よよいと名高なかつたき人ひとあるが始はじめて其身そのみを起おこ
 したる其履歷そのりやくを聞きく時とき々ときよの通常たうじゆの賤いやしき者もの
 とさしたる差違たがひもなほなり一躰いつしん父ちちある比
 爾ビール又また於おつて、一代いちだいの内うち又また以もつて大おほなる身代みしろを固く

め一人ひとりあまきども夫おつと又また就つきて自らみづか本資ほんしの足たら
 はぬ事こともありて種々あまの難儀なんぎも多おほなり、二世
 の比爾ビール之これを見みて最心さいしん苦くしき事こと又また思おもひ、いり
 とまして父ちち又また便たよらば自分ごらん一人ひとりの本資ほんしを以もつて印
 花はなの業わざを始はじめんと、其年そのとし二十にじゅうの時とき又また於おつて心こゝろこ
 世よを志こころざしぬされ、其伯父おお哈活士ハラスといふ人ひと又
 伯拉訖畔ブラキボワンの地ち又また住すめる、耶逸エイトと以もつてへる人ひとととも
 とも、此生業このあひわざをなさんと約やくし互たひに金かねを以もつて出いし合あ
 ひて僅わずかに五百ごひゃくポンドステルリンクステルリンクの資本しやぽんを得え

つ、比爾の其年猶少けども、元來印花の業は熟
く、志す能くならび其性質最沈着て物静くと思
慮分別の深き人故世間之を評判して老人の
頭を少き人の肩に載せし者ありと取沙汰せ
らるる程をせし、今より資本を出し合ひては輕
しくの事を始め先其近所は空地を見出し、
之を下直し買ひ求め、こまに職業小屋を取り立
つ即ち印花の業を開きつ、其上より又此處
にて棉花紡る業をも併せて營み、夜を日は繼ぎ

て油斷る力を裁せて勤めたり、斯く勉強して
怠らざりしより、始めの程こそ資本も薄くいと
事足らぬ職業場なりとも、次第々々は資本も
回り職業もまじり繁昌して、遍ねく世間を行
るより、其工事を近所の者までにも及ぼし
て營まじむるに至り、是よりして生活する者さ
へ多く規模いと廣くになり、又、かくて比爾
は耶逸を計りて其製造する品柄を、工夫の上
より工夫を用ひて、世間は類なき最上等の物を出

さが自然と之を買ふ者も多きと至るべく、又其
 製造は使ふ職人より成るべく、餘分の利益を與
 へて安く其日を送らぬならば、自然と其職より力
 を盡して品よき物をも造るべく、互に深く言
 ひ合せて、殊に比爾の平常の言語は、新規の機器
 を發明するの自身一己の益のみならず、其國其
 世の利とある事故、仮初事とせば、非むとさ
 へ言へり、さきばこきよで職人より計算よき價
 直を與へつゝ印花の術を益々工夫し、多くの年

月心を用ひて様々力を盡し、ついに終る其布の
 光澤殊よて、其印し出せる花葉の模様の色を以
 ひ文を以ひ美麗しく、とて、嬋妍なるを英國と
 の評を得つ、大に其志を成し、遂げて家富を榮え
 繁昌の暇、其業を人に傳ふ、其業を人に傳ふ
 ③ 我喜斯可的及び織線帶機
 ④ 糸糸の線帶の事あり、絹麻まゝの棉
 の主として糸糸の如く織り、婦人の飾に用ふ
 者、線帶即ちリスと言ふ、

喜斯可的ヒースコートの一千七百八十四年、我が天明十四年の生なまみして、禮斯托舍レイストトといへる地のいと微小ちひさかなる農家の子あり、初め、郷村の塾じやうに在りて、讀書とくしよ作文ぶんを學まなびける、幾程いくばくもなく、機架きかの類るいを作る、工人こうじんの門弟もんていとなす、其家そのいへに入りて、業わざを修をさめつ、きる、喜氏キイの性質しやうせう自然ぜんぜんと工事こうじに才さいありて、此時このときより、童子どうしあり、お、大工おおく道具どうぐを巧たくま者しやと使つかひ、又織オリ襪はき機きの製造つくり方をいと詳細しやうじゆと合あ點てんしつ、其上そのうへ經系きやうけいを取り揃そろふる、機開きひら道具どうぐのいと錯綜さくそうたるもの

さへ、いと明瞭あきらかと了得しやうとくつ、間隙ひまたよあらば此機このき器きの破損はたんせるものを修補しゆほはんと、心のけたる程ほどあま、バあ、其年そのとし甫なほめて十六歳の時ときよあさりて、博金舍ボッキンハムレース、ま、ハ法蘭西フランスレースの如ごとき、レースの内うちふも上品じやうひんある品しなを織オリり出だす、機關きかん器械ききを造つくらばやと始めて思おもひ起おこしたり、その線帶れんたいをバ此頃このころまでの皆人みなひと手てにて編あむ、故ゆゑありされバ喜氏キイの織襪機オリハキの機關きかんよりして工夫くふうを起おこし、又經系きやうけいを取り揃そろふる架子かすを改あらため造つくりつ、こま

又依りてレース又似る手套の一種なる、ミツ
テンといふ織物を始めて造り出したるは、かく
てハレースを織る機器を造らん事も難きは、何
ら此と一層心は勵み勉め、夜昼工夫を怠らざり
とて、そのハレースを織る器械は是より前
ある人之を造らんと思ひ立ち、織機を造り改
めて之を拵へ出しけるは、其器械にて織りたる
線帯を編む目恰も襪の如く、糸を交互に入交へ
て、重ね織りたるものなる故地合も薄く弱く

ていまと充分あらざるは、諾可舎又住居せ
る人々、網の如く糸を編むべき器械の發明を
願ひ望み、工人の中にて此器械をいりて作り
出さんとて工夫を用ひし者も何りしが、或は病
にて終り身おのり、又ハ狂氣して其地を逐はせ
あどして皆其事をなす遂げさせしもの、人手を
用ひて編むより外は、不足を言ひ言ふもの
の猶在來の器械を用ひつ、其間も
かくて喜氏の二十一の齡も漸く踰えたりけり

ばさるへき縁を撰て妻を娶り、諾丁舎の地は
赴き工事を營て生計をたてしむ、其間も線帶
機器の工夫は心を盡しつゝ、手を以て糸を編む
が如き器械を作り出さんといひ、先其手をもて編
む仕方を委しく心は會得べしとて即ち博金
舎レリスを手よて織りなむ術を習ひつ、是より
りまもく工夫を用ひ、種々様々の經驗を重ね、
年月を経て退屈せば艱難辛苦を事とも思はむ、
却りて之を其工夫の基礎を開く助とす、遂は

必也其志の成るべき事を深く信じて、弥々力を
用ひけり、元來喜氏の性質物静よして言語寡く、
いと淡薄ある人なりしは、其志のあらざる程
も、さまで憂ふる様も見えぬを、其妻安氏の
夫の業は久しきを經て成り難きをいと心苦
しき事と思ひ一日はあろう片時も早く其志を
成し遂げて、夫の喜ぶ顔のやと最苦ろと思ひ
入りたり、かばるり工夫は月日を費やし年來も
もなりしは漸く貧苦は迫りつゝ、今ハ生計も

立てかぬまは、日傭稼を營につら、辛くも其日を
送りたるが、かくて許多の年月を経て種々の苦
難も凌ぎをふせ漸く志も成らんとせし頃あり
とらや或る土曜日の夜其妻安氏のほの暗き燈
火の影のうげつ、多年の辛苦又憔悴へく夫の
顔をうちまもて、いふは吾夫線帯の機噐の取り
用ふべくあり侍りやと問ひけるは喜氏の答へ
てさまはとよ、是また丹誠を凝し機器へまど
充分に至らざまは、猶まゝ再び改めて作り出さ

ばやと思へるありと言ふを聞きも敢へば安氏
の忽ちはらくと零るる涙もせきのぬへつ、諸
の吾夫の心盡しを猶未永き事ならんとて声も
惜まばよと泣きぬ、其後數十日を経て喜氏
の一日外より歸り來りしが、其様欣然として
いと悦ばしげみ得意の景色容貌は溢して、ホッ
ピンネットと称けたる、網の目の如く編きたる
線帯の其中狭きを携へ持ちきて、之を其妻安氏
の手は渡せり、是ぞ喜氏が工夫成就し始めて其

機器を用ひて織り試みたる線帶あり、その此機
 器の製作の最も錯綜たるものにて、言語をもて
 述べ盡まべきよあらば、其之を織る機關の様へ、
 恰も人の手の指もて、糸の目を開き又之を結ば
 て線帶を織ると異ならざりて、不思議なるも以と
 巧妙ある工夫よぞありける、
 凡そ新規の機器を發明して、之を造り出せる人
 を專賣免許を得る事あるが、其免許を受る時は
 あたり、兎角よ之を妨げず、彼の創造者よ何ら

び我こそ其眞の發明人ありなど故障をなす者少
 あらざる例あるが喜氏の免許を乞ふ時も亦
 ろる故障を受けたりたり、さるの線帶此工人兩
 人よて密に言ひ合ひせ、互に此機器の創造者な
 ると申し立て、之を官に訴訟して、喜氏の免狀を
 棄つんと企てたり、されば喜氏も其伸理をな
 さんとて、訴訟は練熟たる代言師勞爾德林德忽
 爾斯の、まご其頃の格不例と名のりし程の時
 なりしが、喜氏のことよ托まつ、之を公廳に訴

へんとせると格氏の口供を見畢りて、余は此機
器の活動方並之の運用を心得ぬが、縦いま依
托を受けたりとも、其曲直を辨し難く、さきば先
彼の職工場に至り、此機器の活動方を悉く心
と曉り得て後、充分なる伸理をなさんとて、即夜
直に飛脚船に乗り込め、諾丁舎に下りて、喜氏
の職工場に至り、親ら線帶機器を手ふりて之
を織る事を習ひて、終に巧者としてボツピン子ツレ
リスを織るの法を心得、且其機器の活用の理合

其外委細の事を知りつ、さて此立會吟味の日と
なるとき、格氏の喜氏の代言として、其伸理を
あすが爲め、線帶機器の雛形をば持ち出つ、吟
味の庭にて之を扱ひ、容易く之を運轉しつ、數
年來の工夫を究めて、辛くも之を發明したる、次
第順序の一伍一什を、いと悉く明白に、然も
辨説爽快に、解き示し、うりうりのが、裁判官を始め
として、参坐の人々、傍聴人まで、何れも驚き、感ぜ
ぬ者なく、終に喜氏の創造者たるの、疑もなき事

と決して異議なく免状を受け得たり、かく此訴訟も事なく済みて、喜氏の免状を受け得らるるが、全國中の線帶機器を所持せる者より、創造者より對する税銀を出さしむるは其數甚ぶ多くして、いと盛大なる利益を得つ、殊は自ら工人を用ひて織り出せる所の線帶よりして收むる利益最も多く、且此機器の世上は弘まり行はるる事も速くありけるが、線帶の價格次第は減つて二十五年の間よりして、三尺四方の壹枚にて五

封度ありて代價の下りて、僅は五邊士にまでなるに至り、其賣り出せる仕切金の毎年四百萬封度は下らざりけるが、是をもて職工場にて使役する工人十五萬人の雇料となしたりけり、喜氏の千八百九年我國文化六年に當り、禮斯土舎ひて線帶を織る工業を開き始めけるが、僅三年の間よりして、其業益々盛りを行はせ、數多の人數を使役ひけるが、其賃銀の一週七日の間は一人よりして、五封度より十封度をぞ與へたるか

く賃銀を得て活計を立つる人其數追々増し加
り、現其在價の下落を憂ひ、又未終其業
を失えん事をも恐きて竊に互に示し合せ、機器
を所持する家も押し入り、之を壊ち破らんと
企てたり、時は千八百十一年我國文化八年に當
り、終に互に徒黨を結び、白昼處々の工場を押し
入りて、無二無三にも機器を破りつ、柳原、機
器の造作、いろいろも精しく、細田、一植受

けたるのこゝろ、総ての機關に忽ち破きて無
用の物となきり、加之この職業場、多くの市
街を離きたる邊僻の地もあるをもて、斯く黨を
組んで摧破せよ、大に便利を得たるとぞ、其
内諾丁舎の地に於ては、騷動最も烈しくして、拉
徳と云ふ者魁首とあり、多人數一味の徒黨をな
し、毎夜隊伍を整へて、線帶機器の工場ある家毎
に押し入り、之を破壊ちつ、さきばかりが爲め、家
業を失ひ衣食の道も惑ひつ、路頭も呻吟ふ者

多く目も當らぬ景状あり、さきど此黨類の出
 没進退最も密にして尋ね捕へん術もあらず
 あり終りの兵器をさへ携へ持ち、約克舎ま蘭
 加舎の工場に入り、烈しく器械を撃ち破り、火を
 さへ放ちて乱妨しけし、官母も夫々用意あり、
 兵士も命じていと嚴重に追捕しめ、漸く乱をぞ
 鎮めてける、
 此頃喜氏も亦ラットの災難に遭ひつ、一千八百十
 六年我文化十三年の復の頃、一群のラットの黨隊

を組みつ、妻抜刺の地は押く來り、喜氏の設け
 工業場は乱き入りて、彼方此方火を放ち
 り、憐むべし此處は安置する三十七臺の機器
 一つも残らば灰となりて、損失一萬封度は値
 了つ、此時徒黨の者の内十人程は捕獲はき、八人
 死刑に處せらるゝ、喜氏の其地の人民より其
 損失の償を出さん事を求めけしと、人民之を兼
 諾はねば、已むを得ずして訴をかく裁判官の裁
 断にて、終は一萬封度を喜氏に償へり、此時埴盆

舍府下なる知抜敷と云へる地は、いとも手廣き
 空屋あり、この其昔獸の毛を取扱へる工場な
 り、此地は於て營ミたる毛織の職業衰へしよ
 り、人民もよま貧窮し此工場も空屋となりて、用
 ふる人もなかりけき、喜氏ハ之を買ひ取りて
 線帶を織る場所とあり、再び工場を開きたりし
 が、其設立の廣大なる、前方よりも遙まき、
 て設置く機器ハ三百臺の多數に至り、盛業を
 營ミけり、

喜氏ハ蒸氣の力を借りて、田地を耕し器械を作
 らんと心掛け、數年の間精神を注ぎて、工夫をか
 くだりける、終は蒸氣犁と云ふ機器を作り出
 して免狀を得たり、此時までの田地を耕す器
 械は、この便利の物ありし、が、人々大に悦
 びて、最便宜なる物とす、たゞ其後厚列爾と
 いへる人の發明せる、蒸氣犁あるもの世は出で
 しより、喜氏の器械ハ廢まじけり、
 喜氏ハ元來天資事ハ敏く、才鋭く、且正直な

て忠厚ある人なりしが、其一生の間は於て、か
 り偉い業を立てたる程なきは、常は繁劇の
 多しども、其餘暇をもて法蘭西語以太利語を
 さへ習ひ學び、いとも精しく其文法を心得つ、又
 世の學士文人あどの作り出せる詩歌をば、め
 絶まじく文字を細精と味ひ、平常心は記憶しつ
 つ、何事も依らば都べての事、廣く渉り遍ねく
 達して、深き心得ありとれん、又其年少き者を
 見て、力めて之を導き勵まし、工事と他事をく

従ひつ、自ら才能を磨き出して、力を充分に伸
 びさせんと心を用ひ、又其工業は役使ふ工人の
 爲めなり、いと信實ある仕法を設け、其工業を營
 営に在るは、いと安樂な生活もたれ、其上次第は利
 運を開く、基礎とあるべき道を立て、授けけ
 ば、其手は従ふ二千の工人、喜氏を戴き仰ぐ事恰
 父母は異あらば、其外不慮の災難は羅り、又運
 命ありくして、貧窮辛苦に陥る者來りて救助を
 乞ふ事あるは、必ず手厚く之を扶助けつ、又工人

の子供を教へ育てん爲め、六千封度の金を出して、學校を建て設け、いと懇切に導きて、童子の業を學ばしめたり、喜氏の性來物、和るは爽快として、元氣の人あり、さまに交を締む人、貴賤貧富の差別なく、何人も皆其徳を慕ひ、大に之を親しめりとぞ、

一千八百三十一年我天保二年に當りて、知拔敷府にて民委官を撰びける時、喜氏其選に當りしに、是より巴力門の下院に入り、凡そ三十年間

其職に任じたりしが、同く民委官ある勞爾徳の爵もある、巴爾麥斯敷といへる人と、互に心相合ひて最も親しく交りたり、巴氏も常に喜氏を重んじ、畏こまき友とありたりとや、かくて喜氏、一千八百五十九年我安政六年に當り、年老たりとて職任を退き、其故郷ある禮斯托舎の地に歸り、優閑な月日を送りけるが、二年を経て一千八百六十一年齡七十七にして歿すぬ、

③ 若瓜徳及び花文織機

若瓜徳ジヤクワトクの法國フランスの立翁士リヤウシといふ地ちに住すめる、貧ひく
 き家けの子こなりしうべ、幼少をさかき時ときより學校がくへも通う
 いは漸ゆるく生長せいぢやうせんとする頃ころ、或あるる製本職せんぽんしやくの家いえに
 入りて其弟子でしとなり、朝暮釘書あけむしんが此業このごうを修をさめし、
 此家このいえは年老ねんじやういたる書役しやくの人ひとあり、職業しごくの間隙ひま毎
 日ひ若氏ジヤクは算術さんじゆつを教をへたりし、其性質しやうせうまことみ
 敏捷みんせうくして、幾程いくほどもあく器學きがくを學まぶまで、拮取きやくと
 り進すすみしうべ、彼の書役しやくの老人らうじんに、深ふかく若氏ジヤクを愛あい
 して、斯かくる人ひとこそ導まびき方かたは依よりて、未頼母みらいもく

き人ひとともならめと、若氏ジヤクの父ちちは説とき論ろんして、若氏ジヤク
 の才氣さいきは相應おほしたる職業しごくは改あらめん事をいと懇おん
 薦すすめしうべ、父ちちは實じつしると諾うかひつ、即すなはち
 又物職ものしやく此家このいえに入いりて、其弟子でしとなしたりしうべ、
 いく程ほどもあく又またさらは、活字くわつじを鑄造ちゆうぞうる職工しやくこうの家
 へ送おくりて、其業そのごうを習あひしめたり、かゝり程ほどは
 若氏ジヤクの父ちちの病やまは罹おりて終つひは身みまゐり、母はははへつ
 づきて世よを去さりしうべ、若氏ジヤクは一たび其家そのいえに歸かへ
 り其父そのちちの世よは在ありし頃業ころごうとありたる織機オリを用もち

ひつ、布を織りて生計を立てつ、さまども其織
機の製造法、若氏の心は不充分と思ひしうべ、い
るよともしと自身の新工夫をもて之を改め造
らばやと思ひ起こし、一途は工夫は心を碎きて
其職業をも廢せしうべ、是より次第は貧苦は迫
り、彼是つもる借財は織機を賣りて償ひたりし
も、坐して食へば山も空しく、後よの居宅をさへ
賣代にして、其借金の方よの向けたり、さよば若
氏の家をも失ひ、身を寄る地もあらざるより、他

人の家へ雇へまて、奉公せばやと思ひつ、其口
をくも尋ねたりし、世間の人の若氏が斯く機
噐の工夫も遂げば、零落なたる有様を見て、一向
懶惰者ありと、唯の一人も之を看顧り、世話す
る者もあまりけむ、若氏を今の是までなすと
故郷を離れて伯列斯といふ地へ赴き、繩職人の
雇とありぬ、此時妻の某の立翁士の地へ残り留
まり、草の帽子を造るを業とし、僅は其日を送り
つ、心細くも世を渡さつ、斯くて若氏の數年を

經て、辛くも工夫の功成りて、花文織機を造り出
 して、その此時より前方より、織機の上まで経
 糸を引く時は限りて、人手を用ひしものなりし
 ぶ、若氏の機器の出でたりしより、悉べて器械の
 運用まで、自在に糸をば取回して、此機器は是よ
 りして、次第に盛りに行ひ、十ヶ年の後に至り
 て、立翁士の地は用ひらるるもの、四百臺の多
 きに至り、
 此頃にも法國は乱おこりて、若氏の業も其為め

は妨げらるることならは、一千七百九十二年我
 國の寛政四年に當り、此乱の爲り立翁士の土
 地より出る義兵隊の中は、若氏の其子と共に加
 へり、徒部古蘭西が軍をむらへて、大にこきと戦
 ひたりしも、終に敗れて列印の地の軍は走り赴
 きて、其隊中に入りけるが、固より尋常の人物か
 らぬが、忽ち軍監の鑿識あるかひて、軍吏はこそ
 は擧らさけき、然るに或る日の合戦は、若氏の其
 子と諸共は戰場に臨み戦ふ折しも、兩霰とふる

銃丸の中りて其子の果敢あく死してけまば、側
 在る若氏の心の胸をも裂るる思えて、勇も挫
 け氣も阻み、即ても竊のふ隊を逃け去り、立翁士
 の地は立ち歸りて、其妻の家を尋ね問ふは、妻の
 其の夫は別まよより、永き年月操正しく今日
 迄も彼の草の帽子を造りて加づく、世を渡り
 つ、夫の歸るを待ち居たりく、若氏も心は
 大に喜び、即て此地は潜み隠れて、妻と偕まど暮
 くける、さるは若氏の前方の志を再び思ひ起こ

くつ、以前の工夫を引継きて猶まよ新發明の
 機器を造り出さばやと、端あく思ひの立ちくも
 の世を忍ぶ身の貧苦はさへ逼まば、亦如何は
 ともせん所為あく、免はる角も潜み在りて、
 志も行ひ難し、職工をか以家は雇はせ、工事を手
 づけて為はし、若るはと即て或る工人の家ま
 入りて雇とこそありたりけま、是より晝は其
 工事を營て別は暇もあありけまど、夜は大方
 作業もなけまば、常に自分の志したる工夫は心

を用ひけり、或る日偶々其主人と、種々世間の物
語をなほ折柄前方よりの事ども打ち語らひ、花
文織布を織る機器を改め作らんと心掛くまど、
身の不仕合せよと貧苦又陥り、今日まで志願を
遂げざる事の、一伍一什を告たりけまば、主人を
若氏の志を甚くめでたう大に感へ、又其不幸を
憫みて即ち若干の金を與へ、新規の工夫を營
み立つる費用はこそそとあてしめまはせ、
斯くて若氏の此時よりして専ら力を工夫に用

ふる事を得しむば、夜を日と継ぎて心を碎き、竟
は三月を経て花文織機の改正機器全くと成就な
したりけまば、是迄種々の入組こする手数を
ひて製せし事ども、毫の人手を用ふるに及むば、
総て機關を以て織る事とあり、殊ある便利を
開きまけり、時は一千八百零一年、吾國享和元年
に當り、巴理の都に博覽會を開きて総て工業の
機器類を遍ねく集めて陳べし時、若氏の織機も
其内に在りしが、審査を経て匾く團き記事の賞

牌をぞ受けぬける、さて其明くる年英國の倫敦
 ある、術藝會社に於て廣告をあり、魚網並に船に
 用ふる網織る機器を造らん者より、多くの褒賞
 金を贈るべしと募りたるに、若氏此事を傳
 へき、いで速に此機器を發明して、天下の人心
 を驚かさば、思を潜めて工夫しけるが僅に
 三七日の間、工夫全く成就して、注文通りの機
 器を造り出せり、かゝる程に若氏の工夫は最
 巧者なる人なりと、名次第は高く評判せらる

けき、地方官ある知府の某、或る時若氏を呼
 の迎へて、其機器を取り扱ひ運らる用ふる方法
 を問ひ、委しく談話を聴き取りつゝ、心大に之を
 感ず、即て之を法蘭西帝に奏聞せしむべ、さら
 ば若氏德を召し呼びて親しく其説を聴くべし
 とて、若氏は勅して其機器を持ち、巴理の都に赴
 るに、皇帝は拜謁し、御前には於て機器を組之
 を運らる用ふる方法を、いと詳らるる講談せる
 事、凡そ二時間ばありなり、皇帝は感感斜なら

也、即ち勅して若氏は俸禄を給せらるる諸種の術
藝機器の守藏館の中は於て若氏の居處を定め
らま、やがても此處を織機を設くる工業場とい
をさしめらる、さまは若氏に此はありて、益々其機
器の効用を完全くして精妙からしめんといよ
いよ工夫は心を盡しぬ抑々この術藝機器の守
藏館の一切人の工夫をもて造り出し、諸藝諸
術の機械を悉して納め備へ之を貯へ藏する處
なきは、若氏の常は此中は在りて、朝夕とあく之

を見つ、其心を得る利益實は少あらざり
が、其中より特別に若氏の意は適ひたり、
葡萄岡孫と稱ひ一人が工夫し出せる紋織紬の機
關を以て若氏の之は依り又更に一段精しき工夫
を按じ、僅は一週月の其間、若氏の織機と世に
呼ばるる、最精巧なる機器を以て造り出し、
そも此葡萄岡孫と稱ひ一人は、自然と動き活機
關を造り出せる名人を以て、元來物を造るは天稟
の才智ありて、志し之を好みて措くは、終は癖

をさへなまよ至きり其猶童兒の頃ありとこの
や、或る日母は随ひて、懇意は交はる人の家を訪
ひし、其家の柱は下振時計のありてあり、葡
氏は此時計のゆらくと揺くを見て、子供心は
最面白き事と思ひし、家へ歸りて後、免角は
之を忘れやらせ、數ヶ月の間其理を考へ、遂に工
スケープメントといへる、時計の揺の動機を整
ふる理合を精しく心は悟き、是よりして後、自
分細工は木をもて下振時計を造りたりしが、最

よく時合ひとあり、又こまに引續きて小き
寺院を造りて、玩具とあたりたりしが、其寺の中は
造りし天人を、常は其翼を絶えど動あし、又此内
にある法師の種々様々ある動作をなす事、恰も
生ある者の如く、見る人につまも感ぜしとぞ、是
より葡氏の自然と働く機器を専ら造らんと出
ころざし、人の身軀は解剖の法まよ音楽の道工
匠の術あど、皆そましく委しく修行し、三四年
の年月をば送りぬ、さて葡氏に或る時、チェイレ

リースといふ地の庭園は散歩遊びるときこ
のも彼面は生ひ茂る常磐木の蔭は徘徊り笛ふ
きすさむ人を遙く見てかゝる動作をおす木偶
を作り出さば最興ある事あるべしと思ひたち
數年之間辛苦を積み工夫は心を盡くせしが終
は全く志を達し歩きなほし又笛ふく人を最巧
妙にも造り出さし是より更に工夫を變へて其
後幾程をも経びて算策を吹く人を作り出さし
續きて機關細工の鴨を作り出したりしが其精

妙なるは真に人の目を驚おしたりその自然は
水は浮ひて其翼をもて水を拍ち又首を俯く
て水を飲み或は駢々と声を發して水の上をゆ
く形状真の鴨は異あらば人皆感歎したりと
ど又毒蛇を作りたりしがそのクレヲハトラの
演戲は於て之を用ひたりしは正旦の懐中に入
り即てするくとして出たる時は音客はつ
きも身の毛よだちて如何にも恐ろしくおどろ
おん斯りし程は葡氏の名漸く高く聞えけむ

即て政府の命を受けて、法國の絹織製造場の監督となりくべ、是より織機を改め造らんと志し、漸く工夫を取らざらば、其中は絲を抛うつ器械ありしより、立翁士の地の職人共此器械の出来あがらば、銘々の職業の妨害とある事もやあらんと、胸安あらば嫉み怒り、葡氏の外へ出るを覗ぐひ石を投げて之の中てつ、殆ど命をさへ危のらめけり、されども葡氏を此等の事より心をも留めば、遂は其工夫をなく遂げて、花紬を

織る機關を造り出たり、此後葡氏を長く病の床に臥し、醫藥の手當切驗なく、終は一千七百八十二年、我國天明二年に當りて身まありけり、其生涯は作りし器械の類は、皆悉く女王は獻上したりけるが、女王は之を心を留めし等閑と捨おろさしむるが、終は世上に埋きて、人は知らざる物多しとこそいと惜くけし、其中は花紬の機關の事幸ふく、術藝機器の守藏館に貯へ藏めてありしをもて、遂は若氏の目よ

此觸きて、世上の益とあるに至り、
 諸君若氏を新規に造る機器を以て織出せる
 ものを皇后ある予ヨセフィンに獻せしむる皇
 后大に之を賞し給ひ、即ち皇帝拿破崙に奏し之
 を觀覽し供へし、帝もまた深く之を嘉し給ひ、
 更に巧者の工人を召させらまはせ、これに命せて若
 氏の作りし雛形に倣ひつゝ、數多の織機を作り
 出させ、之を恩賞として悉皆若氏に下し賜ひし
 り、若氏も世にあき面目を得て、即ち巴理の

都を立出て、己の故郷の立翁士に立歸りぬ、さる
 立翁士の工人共々、若氏が今回の事を聞き、其
 各自の職業は妨をおさん事を恐ま、之を見
 事仇敵の如く、物騒おしく、多人數打ち集り互に
 喋り合せつゝ、若氏が持ち歸りし數多の織機を、
 一ツも餘さず破毀たんと、徒黨を組みて企てし
 め、さすがに皇帝の賜はりたるものなれば、兵隊
 厚く之を保護りて、充分手當を施しけしむるま
 た如何とも爲んすべし、其事をさて止むたり

くが、一揆の徒黨ハ若氏徳の像を作りてを燃
 架又掲げ、罪人をは誅戮せりとして、彼方此方を叫
 ひ走り、又聊の隙又つけ入り、若氏の家又乱入
 て機器の一通りを打毀し粉塵微塵とあすのこ
 あらず、多人數の工人共無残とも若氏を捕へ之
 を海岸又曳き行きて、あそや水中又沈めんとせ
 いを辛くも遁るゝ道を得る危き命を全く得
 たり、
 若氏ハ斯る危難又遭ひし、其發明せし織機ら

此危難の爲め故障を生せし、漸く盛う又行はま
 んとせりその其行はるゝと行はまぬと、元來
 時世又依るものにて、人事又關するものあらね
 ばあり、諸も若氏の斯の如き危難又遭ひし事、
 世上は廣く聞えよけまの、英國の織造局の工人
 某氏の便又寄せて若氏又勧め、英國又來りて住
 居かさば、さる難儀又遭ふ事あく志も十分立
 んとよと懇篤ま言ひこけまども若氏の性來
 吾が生國を愛する心最深く、縱令郷里の人々よ

り難面き仕向の受るとも、其爲め他國は移らん
事は好ましくあらぬ由を述べて、竟は招きは従は
ざりけり、さるは此後英國にて若氏の機器を用
ひつゝ、盛りは布帛を織り初めけき、立翁士の
地の人々も、斯くては終は英國は利を奪はきん
も知るべのらずとて、是より始めて此機關を土
地は用ひ試みたり、そも此土地の工人ともは、
此機關の行はるゝに至らば、自分々々の家業を
失ひ活路は窮せらる事もやあらんと、甚覺束あく

費心たたり、此機關を用ひ始め、より思の外
は職業榮えて、織工場は於て召し使ふ人数追々
増し加はり、一千八百三十三年我國天保四年は
至りては、立翁士織工場の工人は、総て六万人の
多きは及び、其後猶まゝ夥しく増し加はる
に至るりとぞ、
是より若氏の常は立翁士は住居しつつ、最安ら
るゝ世を渡りつ、或る時若氏の誕生日はあたり、
彼の其昔若氏を捕へて海岸は曳き出し、水は沈

めんとせし工人ども、今何れも若氏の手は附
 き機械の工人とあり居たるが、是等の人々打寄
 りて、若氏は乞ひて若氏と共々昔の道路を通行
 し、今日の幸福を賀びて、誕生日を祝はんとか
 けきども若氏の元来遠慮深き人あまひ、さる事
 事しき事を好まば、終之を許さざりけり、斯
 くて若氏の其年齢六十歳に至りし時、其父の故
 郷の地より引き退き、安静に老を養ひたりしが、一
 千八百三十四年我國天保五年に當り病に依り

て此地に歿しぬ、其後人々若氏の功を思ひ、像を
 刻きて之を立て、永く若氏の記念と仰ぎぬ、され
 ども其親族の次第は貧窮とあり、若氏の死して
 より僅に二十年に及ぶ頃曾て若氏の存生中より
 路易十八世より賜はりし金の記事匾額をさへ
 其姪にあたる二人の者、僅に數百フランク
 にて賣代あす程の困窮に陥りけり、抑立翁士
 の地の繁昌は全く若氏の織機を工夫し出せる
 により事あまば、其親族の斯くばあり、困窮する

をが如何いかによりして助たすくる法はたらきを立つべきあるは、
去りとしていづれの不入情ふれんじやうある土地とちの人氣じんぎありとて、心
ある人の歎なげぜりと云ふ、

③ 夷爾滿並は梳治機

梳治機そぢきといふ布ぬいは織おるべき棉麻等めんまとうを打
ち梳そへて、之を絲いとは製つくるまでよあす
器機ききを言ふ、

夷爾滿ハイルマンは一千七百九十六年、我國寛政八年は法
國フランスのモルハウスと言ふ地ちは生うまゝ一人あり、元來もとより

此モルハウスといはる地ちは、棉花けふめんを製つくる工しごと
場ばのある處ところにて、夷氏ハイルの父ちちは棉花けふめんを扱あつかひ、其職業しご
とあたりけき、夷氏ハイルは十五歳の時ときよりして
父ちちと諸共もろとも此工しごと場ばに入りて其業わざをばなしたり
しが、生來うまれながらより工わざ事の才さいありて、其志こころざし篤あつかりけき
は其職業しごの間暇いとまごとみ、器學きがくは深く心こころを用もちひ其
事ことを習ならひたり、其後のち巴理パリの都みやこは赴おもむき、伯父おぢあ
る人の銀行商ぎんこうあやうを業わざとして何なにりけき、其店みせは住
居まゐり、晝ひるは其商業あひびを取扱とらひ、夜分やぶんは至いたる筭術さんじゆつ

を他事たじかく學まなびて在ありけるが、原來もと商業あきあひの其志こころす所ところはあらねば、故郷こきやうモルハウスの地ちの親類しんるい中ちゆうは棉花わた糸いと紡とる業わざを職あつとする、小ちひさき店みせの何なにりけまは、夷氏へいしの更または此業このわざを習あらんとて復またたび此處このところは引移ひきうつりしが、此頃このころ折ありよき機き會かいありて、法フランス國こくの總ともての器き械けんを集あつめ置おく百工ひやくこう機き器き貯藏ちよざう館かんと号あぐる所ところの生徒せいととある事ことを得えたりしは、是こゝより益ま々ま力を盡つくし器き學がくを習あらひ學まなびよけり、
 そもく棉花わたを此時このときまで、之これを糸いとと紡とる迄までは

あまを、全まく人ひとの手業てわざは懸かぐる事ことにて、最煩もとづかはることき手て數かずを用もちふるものなまは、夷氏へいしの棉花わたを糸いとと紡とる迄まで総ともて機き關かんの力ちからを用もちひて、人ひと手てを省はぶく器き械けんを造つくり出ださんと思おもひ立たち、專せんら之これは心こゝろを盡つくつ、此頃このころ夷氏へいしの工夫くふうは依よりて始はめて造つくり出だしたるは、繡かひのり摸も樣ようをあま機き器きは、そは一回いっぺんの運轉うんてんは、二十本の針はり同おなじく運めぐりて、繡かひのりをあま機き關かんありしが、こを工夫くふうし始はめし時ときより、大凡おほま六ヶ月ろくかげつは、全まく之これを成なり就しゆあり、一千八百三十四年我國わがくに

天保五年は當りて法國は開きける展觀場は出
 品せしむべ、其功あるを賞せらきて、金の賞牌を
 賜りぬ、是より後引續き種々世の中は利益
 ある機關を數多造り出さる、其中より取り
 別けて、世の人の目を驚かしたるは、一箇の機械
 の運轉して、二通りの天鵝絨を同時は織る機關
 なりけり、されども棉花麻の類を打ち梳へて、糸
 は紡る迄の作用をおも梳治機器は、是等の機關
 は遙るは勝り、世上の利益をおも一形ならず、

るあらは又此機關を全く成就し果つる迄の千
 辛万苦も一形あらざ、其艱難の概略は、後記せ
 る話頭を讀みて知るべし、
 此時代は當りて、棉花を梳ふる梳治器械と云ふ
 ものを何りしものども、其製作いよも粗みし
 棉花を糸は紡る迄は、是非とも人の手數を用
 ふるのみならず、此器械は掛くる時、棉花を
 費やし損あふ事殊は甚しきありけり、此器械を
 改めて、便利の工夫を發明せん者、五千フ

ンク 五千フランクは凡その褒賞金を授けんと、
紡棉工場は於て觸を示しけり、
亘氏を前方より
して長き棉花を打ち梳ふる機關を工夫し出さ
んと豫々心掛けたりし事あるに、此觸を示しを
聞とひとく然らば其機關を作らんと、大志
を決めたり、さきとも亘氏の褒賞金の欲きが爲
め、此志を立てしといふは非ざりて、紡綿工
場にて賞をさへ掲げて募る程の物あるに、如何
よりもして之を工夫し、見事立派に造り上げん

と扱こそ志をば決めしあき、
諺に云へる金の多
少を考へて爲す程の者にて、
決して大事を仕
遂げ難くとの言詞の如く、
若し亘氏に賞金の爲
め志を立てしあらんは、
終に成就の功をば得
ざりしあるべし、
元來亘氏に新規の器械を作
出せし事性来よりの癖好にて、
一つの工夫物の世
に起りて、其出来あがり
を望む事あるに、是非と
も之を工夫しあげて其功
を爲し果さんとせり、
さきば此梳治の機器
始め左右あき志を立て

たりしが、最初は思ひく見込より思の外は困
 難くくして、工夫は數多の年をバ送りつ、さきバ
 其妻某氏を從來許多の財産ありて、以と饒ある
 身ありけまバ、庚氏の家の自ら金融も善く富
 たりしが、此工夫の爲め、徒ら又多くの月日を空
 く送りて、さ小浅間いき貧窮とあり、果は悲意
 交はる友より合力の救助を受け、辛くも其日
 を送りつ、工夫は心を盡せしが、其後させる事
 故ありて、英國の地は赴むき、満遮士打といふ處

は住こしが、幾程もあく復び法國は歸り來り相
 も變らば此機器の工夫は全く精神を凝らし、其
 外の事は何事も一切心は留めざりけまバ、益々
 貧窮極まりつ、今如何もなし難き場合
 さへも陥りけり、或る夜庚氏の暖爐の側は在り、
 昼夜の工夫は心は疲ま、躰さへ痺きて心の中は
 自己の運の拙く、今日まで工夫の實効を
 見ぬ、又其爲めは自身を免は角、一家の家族皆こ
 とく、迫る貧苦は憂き難き世を渡らす事

の心とをいさかど、竊は思ひ續けつ、影も小暗
き燈火の下は、其妻始め女兒輩の長き髪を梳け
つりつ、それを其指は夾きての引き伸がく長き
短き夫々分つをつくく見て在りくが忽ち
心は發明して、此機關の中は在りて第一番は入
り組とたる器械の工夫を思ひ得たり、是より
ての次第を追ひて、器械の布置夫々整のひ、終は
棉花麻の類の梳治の機關全く成就するは至き
也、

る心此機關の外よりして、只一通り打見儘
よてり、別は入組混雜せる器械の如く見えざ
まども、其實を極むる時より、至りて紛糾錯綜た
るものよて、是を始めて造り出し、其心勞は此
機關を、たび見たるのよみて、凡そ思ひ知ら
るべし、この言ふもの、此機關の眞實眞味の工
夫の妙の之を實地は取扱ふ人は非ざれば、委細
よの知り得難いとぞ、其物静は器械の運りて、棉
絲の長きと短きとを分ち、又之を夫々は程よく

分ち列ふる様全く人の手を下して、取扱ふは異
おらず、又此機關の發明よして、更は尋常の棉
花を用ひて、極々細き棉糸を、最も容易く紡り製
する、仕法をさへは發明せしむるを、是より交易の
上にあきて、莫大なる利益を得るに至り、その
棉花の價の幾許いせざるものあきども、是を極
細の糸とする時、自然と其價も貴きに至り且
夫のさならずして、棉花の極めて少あくして
極めて多き糸を造り、是其糸の細き故あり

さきバ僅るは其本の量目壹斤の棉花をもて此
機關を懸けて細き糸とあき時、其糸の長さ三
百三十四里とあり、又棉花の價はつきて言へば
僅は一時令のみの、此機關を懸けて上等のレイ
スに製し上ぐる時は、三百封度の價とあるに
至る、凡そ此機關を懸け、製造せる代物の利益大
概六千倍以上に當りとのや、
諸君此機器出来あがりて、始めて世上に出でた
りけまは、皆人其巧妙あるを賞する内より、殊に

英國の紡工人、何れも此機器の無くてはえあらぬ、最も必用なる物あるを知り、蘭加舎の地の
大百姓六家にて言ひ合せ、三萬封度ポンド凡そ我國の
十五万田をわりの大金を出して、之を用ふる免
許を吏氏より買ひ受け、まじ獸の毛を紡る職
工場ことわまでも、こまを用ひて獸の毛を梳き、其利
益を得る事莫大あるに依り、亦三萬封度の金を
出して、之を用ふる免許を吏氏より買ひたり、さ
まバ禮圖のマルシヤルと言ふ人ら、麻を美麗びまら

刷ふるよ、此機器を用ふる時、まゝ莫大の利を
得るをもて、二萬封度ポンド二萬封度の凡そ我國の拾
萬圓ばんげんばかりの金高に當る
の金を出して、其免許をバ買ひ取りぬ、大凡こま
らの機器出より、世間の開化文明ハ、驚くばら
り進歩せしむ、畢竟吏氏其人の如き、辛抱強き人
ありて、工夫の功を立てし、依よまり、

假名讀 改正西國立志編第二編終

月... 五西國立志... 二...

大百姓

と... 江... の... 柱... 山...

と... 並... 終... 其... 人... 辛...

の... 辦... 出... 下... 間... 備... 外... 取... 入...

の... 金... 引... 出... 下... 其... 費... 精... 子... 買... 取... 入...

の... 身... 子... 子... 上... 海... 陸... 更... 二... 萬... 餘... 人... 金... 萬... 兩... 上... 言... 一...

歸... 之... 國... 均... 辦... 器... 者... 用... 之... 者... 亦... 其... 夫... の... 性... 也...

